

刀剣の歴史と思想

第17回

酒井 利信

『太平記』が語る草薙剣像

三種の神器は、武家にとって、戦乱のつづく社会の中で自らの立場を決定づける、非常に重要なものであった。

源平争乱の最中、両軍ともにこれを実際に所有することに執念とも思われるほどのこだわりをみせ、結果、平家の滅亡とともに宝剣である草薙剣のみが紛失する。このことが逆にこの宝剣に対する注目度を増すこととなった。

この後、草薙剣像は、独自の展開をみせる。日本刀剣思想を方向づけることになる、興味深く、また重要なポイントでもある。

このことが『太平記』に如実に語られている。

草薙剣返還説話

今回のメイン・テーマは、『太平記』に語られる草薙剣のイメージについてである。

『太平記』は、鎌倉幕府滅亡と南北朝の争乱を描いた四十巻からなる長編の軍記物語で、南北朝期に書き継がれ、室町初期には成立したといわれている。作者については

小島法師などがあげられるが、詳細については不明である。

『太平記』の中に、草薙剣について、当時どういった捉え方がされていたかを如実に語る部分がある。「伊勢より宝剣を奉る事」の一節である。非常に面白い件であり、思想的に重要な深みをもっている。今回はこの部分の描写を追ってみたい。

そもそもこの話は、むかし安徳天皇とともに壇ノ浦の海底に沈んだ宝剣が出てきた



刀剣の歴史と思想

『太平記』が語る草薙剣像

という騒動である。

伊勢の国に円成という山法師がいて、大神宮への千日参詣の志をたて、毎日海水で身を清めて一晩おきに参詣していた。ちようど千日目の満願の日に身を清めようと磯へ行き沖を見ると光る物がある。この光物、次第に磯へ寄ってきたので取り上げてみると、二尺五、六寸の三鈷の柄のついた剣のような形のものであった。円成はこれを持って大神宮へ参る。

そこにいた十二、三歳の童が急に物狂いになって、次のように言った。

「神代ヨリ伝テ我国ニ三種ノ神器アリ。縦ヒ継体ノ天子、位ヲ継セ給フトイヘ共、此三ノ宝ナキ時ハ、君モ君タラズ、世モ世タラズ。汝等是ヲ見ズヤ、承久以後代々ノ王位輕クシテ、武家ノ為ニ威ヲ失セ給ヘル事、偏ニ宝剣ノ君ノ御守ト成セ給ハデ海底ニ沈メル故也。剩ヘ今内侍所・璽ノ御箱サへ外部ノ塵ニ埋レテ、登極天子空ク九五ノ位ニ臨マセ給ヘリ。依レ之四海弥乱テ一、天未レ静。爰ニ百王鎮護ノ崇廟ノ神、



伊勢神宮

龍宮ニ神勅ヲ被レ下テ、元暦ノ古ヘ海底ニ沈シ宝剣ヲ被レ召出一タル者也。スハ爰ニ立テ我ヲ見ルアノ法師ノ手ニ持タルゾ。――略――

「わが国には神代から伝わる三種の神器がある。たとえ王位を継承するべき君が皇位を継いだとしても、この三つの宝がないときは、天皇も天皇ではなく、治める世も正常ではない。承久の乱以来、王位は軽視され、武家によってその威厳が失墜させられているのは、ひとえに宝剣が君の守りとな

らず海底に沈んでいるためである。のみならず今は内侍所である宝鏡と曲玉をおさめる箱さえ都の外の塵に埋もれていて、都にいる天子は権威のない位についていらつしやる。そこで百王をお守りになる祖神天照大神が龍宮に神勅をくだされて、元暦の昔に海底に沈んだ宝剣を返すように言われた。それがそこに立っている法師が持っている物である」と。

いわゆる憑物による「神託」である。

ここでまず注目すべきは、三種の神器が伝えられていない天皇は天皇ではないという記述である。三種の神器を、皇位の標識として重視する風潮がいかに高まっていたかがわかる。そしてその中でも、草薙剣について特筆し、王位が軽視されていた当時の状況の理由を、この宝剣が紛失していることに求めている。当時、草薙剣に対する注目度が相当に高かったことが窺われる。

説話の文脈に戻ると、続いて、円成は上京し、日野大納言資明卿を頼って、宝剣を差し出した。資明は、とりあえず円成に銀造りの剣を三振と着物をあたえ、宝剣を春日神社の神殿に納めた。

三種の神器がない
天皇でない

草薙剣に対する注目度



夢 神と人が接触

Ex.平清盛の厳島におけるお告げ

Ex.神武東征伝説（初出か）

資明は、『日本書紀』に詳しい平野社の神主である神祇の大副兼員をよんで、三種の神器について説明させる。資明は兼員の説明を聞いたあと、今回の事件の経緯を話している。

続いて、兼員は次のように言う。

「但今モ仏神ノ威光ヲ顕シテ人ノ信心ヲ催スハ、夢ニ過タル事ハナキニテ候。所詮先此劍ヲ預ケ給テ、三七日ガ間幣帛ヲ捧ゲ礼奠ヲ調、祈誓ヲ致シ候ハンズル最中、先ハ面上皇、関白殿下、院司ノ公卿、若ハ將軍、左兵衛督ナンドノ夢ニ、此劍誠ニ宝劍也ケリト、不審ヲ散ズル程ノ夢想ヲ被ニ御覽ニ候ハシ、御奏聞候ヘカシ。」

「仏神の威光を示し、人に信仰心をおこさせるのは夢以外にはありません。まずこの劍をお預かりして、二十一日のあいだ祈りましょう。その最中に、面上皇、関白殿下、院の御所に勤める公卿、將軍、左兵衛督などの夢に、この劍が真実の宝劍であるというような夢想をご覧になれば、天子に申

し上げてください」と。

この劍が本物の宝劍であるかどうかの真偽を、夢によってはかろうというのである。

日本には古くから神の意志が夢によって人に伝えられるという考え方があり、『平家物語』「大塔建立」の一節で、平清盛が夢の中で厳島の大明神のお告げを受けた話③などは、その典型である。根本には神々と人間が夢を介して接触するという思考がある。神武東征伝説で、武神タケミカヅチが夢を介して靈劍を下界にくだした話③あたりが初めではないだろうか。「仏神の威光を示し、人に信仰心をおこさせるのは夢以外にない」という考え方は、こういった思想の流れが下地にある。

この劍をあずかった兼員は、平野社の神殿に劍を安置して、十二人の僧に大般若經を読ませ、三十六人の神子に長時間の神樂を舞わせた。

二十一日目の満願の日に、鎌倉左兵衛督直義朝臣が不思議な夢をみた。五色の雲が立ちのぼる中あかあかと輝いている太陽があり、その光の上に宝劍と思われる劍が立っている。それを梵天、四天王、龍神らが

とり囲んでいる、という夢である。伊勢大神宮から宝劍がもどされたために、執り行われた儀礼の様子を描写した夢であるという。

兼員は急いでこの夢のことを資明に報告した。これをうけて資明は天子に申し上げ、八月十八日の早朝に諸卿が参列し、宝劍を受け取った。

ながく行方がわからなくなっていた宝劍が、めでたく返ってきた。

宝劍返還説話の大逆転

しかしこの話は、ここで終わらない。以下、『太平記』の中の草薙劍像が徐々にあらわれてくる。

当時の朝廷には勢力を二分する賢臣が二人いたという。一人は今回の宝劍返還に尽力した日野大納言資明であり、もう一人は坊城大納言経顕という人である。力量のある者が二人いれば争うのが世のならいであるが、この二人も例外ではなかった。そして、以下のような展開をみせる。



刀剣の歴史と思想

『太平記』が語る草薙剣像



太平記（図説日本文化史大系7）小学館、1968年より）

爰ニ伊勢国ヨリ宝剣進奏ノ事、日野大納言被^レ執申^ニタリト聞ヘシカバ、坊城大納言経顕卿、院参シテ被^レ申ケルハ、
—中略— 倭臣仕^レ朝国^ニ有^ニ不義^一政^一トハ是ニテ候也。先思^テ見候ニ、素盞烏尊古^ニへ簀^ノ河上^ニテ切^ラレシハ岐^ノ蛇、元暦^ノ比安徳天皇ト成^テ、此宝剣ヲ執^テ龍宮城ヘ歸^リ給ヒヌ。其ヨリ後君十九代春秋百六十余年、政盛ニ徳豊ナリシ時ダニモ、遂^ニ不^ニ出^ル現^一宝剣^ノ、何故^ニ斯^ル乱世無道^ノ時^ニ当^テ出来^リ候ベキ。

宝剣返還が資明の執りなしによるものであることを聞いた経顕は、院に参上して「倭臣が朝廷に仕えたと国に不正な政が行われるというのはこのことです。まず考えてみるに、スサノヲにその昔、簀（肥）の川上で斬られた八岐蛇が元暦のころ安徳天皇となつてこの宝剣をとつて龍宮城へかえつたものが、その後、政治が盛んで徳が豊かな時代であつてもついに出現しなかつたのに、なぜこのような乱世無道の出で出てくるものでしょうか」と申し上げた。

壇ノ浦での宝剣紛失を、昔、スサノヲに斬り殺された大蛇が霊剣を惜しむあまり安徳帝となつて取り返し海の底で神龍の宝としたという、『平家物語』にみる独自の中世神話を引用したものであるう。いづれにせよ、問題にされている剣は偽物であるとの主張である。

経顕はさらにつづけて、

若又直義が夢ヲ以テ、可^レ有^ニ御信用^一ニテ候ハ、世間ニ無^ニ定相^一事ヲバ夢幻ト申候ハズヤ。サレバ聖

人ニ無^ニ夢トハ、是ヲ以テ申^ニテ候。

「もし直義の夢をもつて信用されているのであれば、世の中に定まった形のないことを夢幻と申すではありませんか。聖人に夢なしとはこのことをいうのです」と申し上げた。

経顕の夢の解釈には、どうも中国思想の影響があるのではないかと感じる。実際には、聖人は心が正しく雑念がないから安眠し夢などみることがない、という意味であるが、これを説明するのによくもちだされるのも、『莊子』の「古の真人は、その寝ぬるや夢みず」（古の真人は寝ても夢を見ることがない）との一句である。こういった夢の解釈には、抽象的な思考を好まない古代中国人の特徴がよくあらわれている。経顕は、日本に古くから伝わっている、神の意志が夢によって人に伝えられるという考え方をもとに宝剣の真偽を確かめようとした資明のやり方を、全く違った夢の解釈から批判しているということである。

中国思想における夢の解釈



では宝剣草薙とは
何なのか！

刀剣の歴史と思想

『太平記』が語る草薙剣像

経頭は最後にこう言う、

「綸言再シ難シトイへ共、過則
なけれはばかることあらむに
勿レ憚レ改ト申事候へバ、速
ニ以前ノ勅裁ヲ被レ召返一、南都ノ嗽訴
事未萌前ニ可レ被レ止ヤ候ラン。」

「天子のお言葉というものは撤回しにくい
といわれるが、誤りとわかれば直ちに改め
るのに憚ることがありましようか」と。

驚いたことに上皇はこの意見をあつさり
聞きいれ、院宣を覆して宝剣を平野社の
兼員にもどしてしまった。

草薙剣像のひとり歩き

面白い話であるが、古代からの一連の流れ
を考えると腑に落ちない感はある。

では宝剣草薙とは何なのか、ということ
である。

『平家物語』にみた源平争乱ではあれほど
までに固執し、『太平記』にあっても、「三
つの宝がないときは、天皇も天皇でない」

とまでいって重視し、「王位は軽視され、
武家によってその威厳が失墜させられてい
るのは、ひとえに宝剣が君の守りとならず
海底に沈んでいるためである」として問題
視してきた草薙剣。それが本物であるかど
うか、その真偽を確かめようとした資明の
態度は、これまでの経緯から考えて当然で
ある。これを夢により確かめようとした方
法についても理解できる。しかし、あまり
に不可解なのが最後の展開である。

朝廷内の特定の二人の仲が悪いというこ
とだけで、反対意見がまことしやかに展開
され、驚くべきことにこの理屈によって宝
剣の真偽までが簡単に覆ってしまう。ここ
に前時代とはちがう草薙剣像がある。

「人に信仰心をおこさせるのは夢以外には
ない」という兼員の言葉が如実に語ってい
るように、『太平記』において重要なのは、
人びとに信仰心をおこさせることであり、
その対象は何でもよかったとも考えられ
る。宝剣の真偽は二の次であった。そして
重要ではなかった。それゆえ片方が納得い
かないとなれば、夢の議論程度で簡単に覆
ってしまい、曖昧にされてしまう。

もはや天皇の位を象徴する宝剣が本物で
あるか、それを実際に所有しているか、と
いったことが重視される段階ではなく、宝
剣の象徴性がひとり歩きをし、信仰心とい
うことばを使ったが、その象徴性が人々に
認められれば社会のなかで機能していく。
『太平記』にいたっては、すでにそういつ
た段階である。

実在のない象徴性ともいおうか。

〈註〉

(1) 「自伊勢」進ニ宝剣二事(巻第二十
五)

(2) 平清盛は、厳島神社の修繕を終えて
これに参詣した際、夢の中で大明神の使
いから「汝この剣をもつて一天四海を
しづめ、朝家の御まぼりたるべし」「汝
はこの剣をもつて天下を鎮め、朝廷の御
守りとなれ」というお告げとともに、
銀の蛭巻をした小長刀を賜ったことが記
されている。『平家物語』巻第三)

(3) 本連載第九回目において、既に紹介
をしている。

(4) 「太宗師篇」

実在なき象徴性